

伝説を公道に。



HULME F1

Champion 1967

ハルムF1チャンピオン1967 from N.Z.



スーパーカー from ニュージーランド

ハルムF1チャンピオン1967。それは、伝説のF1パイロット、デニス・ハルムの名を冠したマシン。南半球の島国、ニュージーランドが、今まさに生み出そうとしているこのスーパースポーツは、F1マシンを彷彿とさせるアビアランスを持ち、オーバー200マイルの実力を備えるという。未だモックアップではあるものの、注目すべきこのプロジェクトの全貌に迫ろう。



魅了する壮大な風景は、ハリウッド映画のロケーションとして注目されて久しい。日本でも人気を博した映画「ロード・オブ・ザ・リング」のこの世のものとも思えぬ美しい景色は、実はほとんどが流行りのCGなどではなく、ここニュージーランドで撮影されたもの。トム・クルーズと日本人俳優、渡辺謙の競演で話題を呼んだ「ラスト・サムライ」のロケも、映画の舞台が日本であるにも関わらず、実はニュージーランドで行なわれている。

そう、ニュージーランドは大自然を有する美しい国として、観光客はもとより、ハリウッドの映画関係者や日本のCF関係者に、最後のロケーションフィールドとして絶大な人気を誇っている。日本と赤道を挟んで反対側となるニュージーランドは、季節も反対になり、これだからがちょうど春になる。大自然が残る……と報告したが、それはすなわち食べ物の充実も意味している。短い滞在だったが、ニュージーランドの食事は日本人の口に合う素晴らしいもので、それを既に知っている旅行好きのOLや学生の間では、人気の海外旅行先でもある。治安も良く、日本からの留学生も多く受け入れられている。ひとことといえば、我々日本人にとって、実に住みやすい環境なのだ。日本と同じ左側通行で、クルマは右ハンドルであることも住みやすさを印象づけているのかもしれない。

こんな申し分のない国ではあるが、自動車産業とは縁遠い。それは自国にジドウシャメーカーをもたないからに他ならない。国内で使用されるクルマはほぼ全量が輸入に頼っている。国産メーカーも実はあるのだが、それはスーパー7のレプリカを生産するバックヤードビルダー的なものであったりするもので、我々のイメージするジドウシャメーカーとは違ったものだ。

あるプロジェクトが静かに進行している。中心人物はジョック・フリーマン。彼は英国自動車界の名門、ロールス・ロイスでエンジニアとして従事し、その後ニュージーランドに移り住んだ根っからのベトラルヘッドだ。ベトラルヘッドとは、頭の中にオイルが流れているほどクルマに情熱を傾けているという、カーマニアの俗称。ニュージーランドでは寝ても覚めてもクルマのことはかりを考えている人々を、親愛の情を込めてこう呼んでいるという。我々がいうエンスージアストと同義語と思えばいいのかもしれない。

ジョック・フリーマンはニュージーランドの南島、クイーンズタウンに住居を構え、アメリカズカップに出場する高性能ヨットの製造などさまざまな事業を行なってきたが、クルマ造りの夢をひとときも忘れることがなかった。それがこの、ニュージーランド初のスーパーカープロジェクトの引き金であり原動力でもある。

プロジェクトのコンセプトは、ずばり「公道を走るF1マシン」である。

ここで敢えて言うまでもなく、地球上でもっとも速いジドウシャとして、F1マシンはいつの世もジドウシャの頂点として君臨している。しかしマシンが走行できるのは、クロードコースのみ。公式には全世界19箇所のサーキットで、トップパイロットの神業的ドライビングとともに、この地上最上級のスペシャルマシンを見ることは可能だが、誰もが簡単にそのコクピットに座れるワケではない。F1マシンをドライブすることが出来るのは、選ばれた20数名のトップパイロットたち。300km/hをオーバーする異次元の世界で彼らは凌ぎを削り、わずかコンマ1秒を短縮するために命を懸ける。その世界を、ジョックは味わいたいと考えた。プロジェクトのスタートは実に4年前、2001年だった。



極

眼を戦うF1パイロットが受け取るギヤラは、年間数十億。ファンタジスタと呼ばれる所以だ。彼らが命を削って叩き出したタイム。それを現実にする性能。F1は、自動車メーカーの技術の粋を集め、メーカーの威信をかけて戦うマシンだ。我々がいそいと運転できるクルマではない。

だが、ジョックは夢を持っていた。我々が日常移動を供にするクルマで、F1マシンの雰囲気味わえないだろうか、と。もちろん公道走行が前提だから、しかるべき安全対策を施し、法規に則ったクルマでなくてはならないが、しかしF1のエキサイティングなイメージを、その夢のクルマに投影することはできるはずだ。誰も、公道を300km/hオーバーで走ろうとは思っていない。だが、その300km/hオーバーの性能は必要だし実現も可能だ。大切なのはイメージである。F1を下ライブしているというイメージ。

そんなスーパーカーを我々ニュージーランド人の手で造ることは出来ないだろうか。F1並の300km/hの世界を現実にする性能を持ったクルマ。F1のような誰しもが振り向きアピランスを持ったマシン。フェラーリ、ランボルギーニ、ボルシエ、そしてアストンマーティン。誰しもが一度は耳にしたことのあるはずの、ヨーロッパブランドたち。クルマ好きなら憧れを隠せない世界のミリオネラーの愛車となるスポーツカーメーカーの向こうを張れる羨望のマシン。

スーパーカーは歴史ある欧州自動車メーカーの至宝であり、自動車大国といわれるアメリカや日本でさえも、このクラスで本格的に認められるクルマを輩出しきれていない。過去いくつもの大きなテーマにチャレンジし、挫折してきたのか。それは残酷なまでに歴史が証明している。スーパーカーの世界は敷居が高く、実は、ビジネスとし

て成立しづらい特殊なものなのだ。だが、人々はチャレンジをやめない。スーパーカー造りに情熱を傾ける。ジョックもそのひとりである。情熱は先人たち以上のものだろう。しかし、違っていることがひとつある。それはジョックがニュージーランドでスーパーカーを造ろうとしていることだ。イギリスやイタリア、アメリカやドイツでは

モータースポーツのDNAが刻み込まれた、ニュージーランド初のスーパーカープロジェクト。



HULME F1
Champion 1967 from N.Z.

世界最高峰の自動車であるF1のイメージを、公道でも味わえるものでなくてはならない。見た人すべてが振り向き歓声をあげるようなデザイン、誰もが納得するクルマとしての基本性能とクオリティ、そしてモータースポーツのイメージ。この3つを彼は成功するためのファクターだと考えた。現在のニュージーランドには、世界

なく、ニュージーランドで。先人たちと違っているのは、しかもまったく未知な部分はそのに集約される。

ジョックは、ニュージーランド初となるスーパーカーの製造という壮大な夢を現実のものとするために、日夜そのペトラルヘッドをレッドゾーン寸前にまでフル回転させている。

に知られる自動車メーカーこそ存在しないが、モータースポーツの世界とは縁が深く、レーシングドライバやエンジニアでは世界の頂点を極めた人物を何人も送り出している。

たとえばデニス・ハルム。彼はF1のブラバム・チームのトップドライバとして活躍し、4度もワールドチャンピオンに輝いている。現在のF1チ

▶ Making

ハルムF1の開発から現在まで——
「生産化に向けてプロジェクトは進行中」

ハルムF1チャンピオン1967のプロジェクトは2001年にスタートした。デザインはNZマセイ大学教授のトニー・パーカーが主役になり、この斬新なフォルムが誕生。現在はモックアップだが、2006年に走行可能なプロトタイプを、そして2007年にはプロダクションモデルを発表したい意向だ。すでにニュージーランドでは2005年3月、ウエリントンの美術館においてお披露目を済ませている。将来的には100台の生産を考えているのだという。



初期のデザインスケッチだが、ハルムF1にはオープンモデルもプランに？まさにF1ライクだ。



1分の1のモックアップの作製風景。キャビンは大人ふたりが十分に乗れるスペースを確保している。



スケッチ各種。F1マシンをモチーフに、さまざまなアイデアが盛り込まれたことがわかる。フラットボトムやディフューザーなど現在の最先端といえる空力的アイデアも十分マシンに反映されている。



モックアップはFRPで造られたが、実車はカーボンクレーでボディパネルを製作予定だという。



2005年3月に行なわれたニュージーランドでの発表会の模様。200人以上の来場者で大注目だった。



ROSSOの取材時には、オークランド市内のBMWディーラーに、このモックアップが展示されていた。

▶ Director

ハルムF1のキーマンはこの人物——
「ジョック・フリーマントル」

生 粋のエンサー、ジョック・フリーマントルがこのプロジェクトの牽引者。彼はUK生まれで、ロールス・ロイスに永きにわたり従事。その後ニュージーランドに移り、ヨットの設計製造を行なっている。ニュージーランドはヨットの造船で世界トップクラスの実力。他国がFRPを使っていた時にすでにカーボンを船体に使用する

など先進的なデザインを行なっていた。その経験がハルムF1にも活かされているという。「ドアはガルウイングで、5色のボディカラーを用意。オーナーにはファーストクラスでNZに来てもらい、一般道とサーキットで2日間のインストラクションを行なう。もちろんそれも価格に含まれます」。カレラGTよりも安価な設定にしたい考えだ。



▶ NZ?

自然豊かな南半球の島国、ニュージーランド——
「ハルムF1の母国はどんな国？」

首都のある北島と風光明媚な南島のふたつを持つニュージーランドは、日本と同じ左側通行の国。レンタカーは右ハンドルで、ドライブには最適な環境だ。他の国のように右側通行左ハンドルに神経を使うことなく、しかし日本とは確実に違う風景を楽しめる。国土の面積は日本の4分の1程度

だが、狭々しさはなく、大自然が多く残る美しくエキゾチックな印象だ。ショッピングは首都のオークランドで、観光は南島を中心に、山や湖でのアクティビティが楽しい。南半球なので季節はちょうど日本と逆。今なら、自然の宝庫ともいえる穏やかな春を満喫できる。(協力：ニュージーランド観光局)



南島クイーンズタウンのワカティプ湖から映画「ロード・オブ・ザ・リング」のロケの舞台となった山々を見る。この壮大なる美しさはアルプスにも劣らない。



クイーンズタウンの街並み。湖では各種のアクティビティが可能だ。



ドライブの途中で見つけたフルーツショップ。新鮮な果物も名物だ。



首都オークランドを北側から望む。ヨットやボートの多さは特産もの。



真ん中に見えるタワーがオークランドの象徴。自然が豊かという街だ。

ーレンも、ニュージーランド人だ。マクラーレンは自動車界の巨人、メルセデス・ベンツとタッグを組み、キミ・ライコネン、J・P・モントーヤという人気パイロットを擁す。2005年シーズンは惜しくも2位に終わったが、F1の世界では誰もが認めるトップコンストラクターズである。そしてROSSO読者なら決して忘れることの出来ない人物、かのランボルギーニ・イオタの生みの親、ポブ・ウォレスもニュージーランドの出身だ。ジョックの夢の実現と、このニュージーランド初のプロジェクトのため

ーカー、スーパーカー・リミテッドが設立された。近頃トランスポートデザイン学部を設立したマセイ大学のトニー・パーカー教授や、BMWのデザイナーとして知られるチャック・ペリー、国内の有名企業のサポーターも得られた。プロジェクトにはかのブルース・マクラーレンの妹も名を連ねている。公道で味わえるF1マシンのテイストと、誰もが振り向くようなデザインを、というジョックの希望をベースに、ニュージーランド初のスーパーカーにはかつて誰も見たことのなかったような外観が与えられた。これはまさに

もので、フェラーリにも劣らないインパクトを与える。そのボディパネルはカーボンケブラーの複合素材で、車体骨格はアルミニウムのパイプを組み合わせた非常に軽量を設計だ。スーパーカーの目指す性能に対し、クルマの軽量化は、なにも優先して進めなければいけない重要項目。このクルマの最終的な目標重量は、1175kgと市販リッターカー並のウエイトしかない。特徴的なサイクルフエンダーには、フロント19インチ、リア20インチと前後異型サイズのビレリPゼロ・ロツンが収まる。サスペンションは、前後と

ユボーン。その内側にはAPレリーシングの6ポッドキャリパーを装備した。ABSは装着予定だが、トラクションコントロールなどの電子デバイスには極力採用しない方針だ。それは「人間の感性にそぐわないから」と、ジョック。エンジンはBMW・M5の4000ps V型8気筒ユニットを450psにパワーアップしF1マシン同様ミッドに搭載予定だが、現在は新しい5000psのV型10気筒ユニットを積むM5が登場し、最終決定は流動的。どちらにせよ、現代のトップクラスの性能が与えられることだけは間違いない。

進させる夢のスーパーカー、その名称は「ハルムF1チャンピオン1967」という。誰もが驚くようなデザイン、国内のエクスパートの集結によるクリティの高品質な造り、そしてモータースポーツのイメージ。ニュージーランドを代表するF1パイロット、デニス・ハルムが4度目の世界チャンピオンに輝いた年が車名に与えられたこのスーパーカーには、ジョックの考える成功のための3つの要素と、ニュージーランド人のスピードとモータースポーツにかける情熱、そしてペトラルヘッドのDNAが深く刻み込まれる。